

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：14403

研究種目：奨励研究

研究期間：2022～2022

課題番号：22H04057

研究課題名 小学校図画工作科鑑賞学習における国語科との教科連携による教材開発

研究代表者

野網 学 (NOAMI, Manabu)

大阪教育大学・附属学校園・小学校教諭

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 480,000円

研究成果の概要：国語科と連携した鑑賞学習の教材開発を行い、児童のポートフォリオから、各学年の「書くこと」について分析した。鑑賞の能力における発達段階の差はあったと感じていたが、「書くこと」における主題に迫る発問では、発達段階による段階的な傾向が見られたものの、感じ取り方や考え方などに大きな差はなく、その伝え方に巧拙があったことがわかった。さらには、「書くこと」では、鑑賞学習における指導者の発問の重要性が浮かび上がってきた。また、発達段階にみる「書くこと」と「見ること」「話すこと」の3つの観点の違いは、発達段階だけではなく児童の経験や指導者の力量によっても違ってくることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において分析し始めた時には、児童の発達段階を分析することによって得た特徴に合わせた題材開発をして、今後の鑑賞学習に活かすことができると考えていた。しかし、分析することにより、発達段階にみる「見ること」「話すこと」「書くこと」の3つの観点の違いは、発達段階だけではなく児童の経験や指導者の力量によっても違ってくることがわかった。それらの具体的な対応はまだ考えられていない段階にある。今後は、まず目の前の児童に応じた発問を追究することにより、鑑賞学習を賦活させて、鑑賞の能力の向上に努めたい。

研究分野：図画工作科鑑賞領域

キーワード：図画工作科 鑑賞学習 対話による鑑賞 小学校 感じ取る力

1. 研究の目的

鑑賞学習の教材開発において「知識」と「感じ取る力や思考する力」の育成には成果があった一方で、ワークシートの記述において「対話による鑑賞」で話し合った主旨が纏まっていない点や自分の考えを書くことができていない点は解決すべき課題として残された。

そこで本研究では、これまでの実践研究で得られた成果を応用・発展させ、記述の質の向上を目指して国語科とも連携した教材開発を行うことで、鑑賞学習の学びの広がりや深まりを目的とした。具体的には、国語科の「書くこと」領域を通して指導する〔知識及び技能〕を鑑賞学習においても反復する機会を与え、定着を確実なものにする営みである。国語科において、様々な情報や身に付けた知識・技能を活用して相手に伝わりやすく表す「書くこと」の能力を応用した。その後、児童の記述した文書をテキストマイニングにおいて分析し、小学校1年生から6年生で実践した鑑賞学習のポートフォリオを「書くこと」について分析し、浮かび上がってきた発達段階別の傾向を掴んだ。

2. 研究成果

鑑賞学習《神奈川沖浪裏》のポートフォリオから、各学年の「見ること」「話すこと」「書くこと」について分析した。「見ること」の領域では、「目に見えるもの」「形」「色」の観点を見つけ出すことについては2年生から6年生まで差はなかった。「話すこと」の領域では、発達段階において語彙力の差が少し認められた。「書くこと」の領域では、お話づくりの記述において、国語科「書くこと」の能力の違いは明らかであったが、内容の差は少なかった。船が津波に襲われているお話が多く、発達段階が上がるにつれ、語彙や文と文を繋ぐ言葉が増えた。「そのお話を描くために、どんな形や色であらわしているのでしょうか？」の作品の主題に対する記述(図1)では、1年生から3年生までは、お話づくりと区別することや発問の意味を理解することが難しかった。4年生から段階的に、発問に対する答えを導きだせるようになり、6年生は美術の要素に関する語句を扱うことができていた。全体的に無回答率が高かった大きな要因として、2つ目の発問のわかりにくさがあった。鑑賞学習を実践する上で、発問の大切さが浮かび上がってきた。

また、1年間、鑑賞学習を積み重ねた2年生が上級の3年生よりも、主題に迫る記述が多くみられたことから、鑑賞の能力である、感じ取る力や思考する力は積み重ねることで育成されることが示された。更には、対話による鑑賞を踏まえてから記述をしているため、指導者のファシリテートの質により、発達段階よりも主題に迫れるか迫れないかが左右されると感じた。以上の結果から、鑑賞の能力における発達段階の差はあると感じていたが、「書くこと」における主題に迫る発問では、発達段階による段階的な傾向が見られたものの、実際には「見ること」「話すこと」「書くこと」についての感じ取り方や考え方などに大きな差はなく、その伝え方に巧拙があることがわかった。さらには、「話すこと」と「書くこと」では、鑑賞学習における指導者の発問の重要さが浮かび上がってきた。

本研究において分析し始めた時には、児童の発達段階を分析することによって得た特徴に合わせた題材開発をして、今後の鑑賞学習に活かすことができると考えていた。しかし、分析することにより、発達段階にみる「見ること」「話すこと」「書くこと」の3つの観点の違いは、発達段階だけではなく児童の経験や指導者の力量によっても変わることがわかった。それらの具体的な対応はまだ考えられていない段階にある。今後は、まず目の前の児童に応じた発問を追究することにより、鑑賞学習を賦活させて、児童の鑑賞の能力の向上に努めたい。

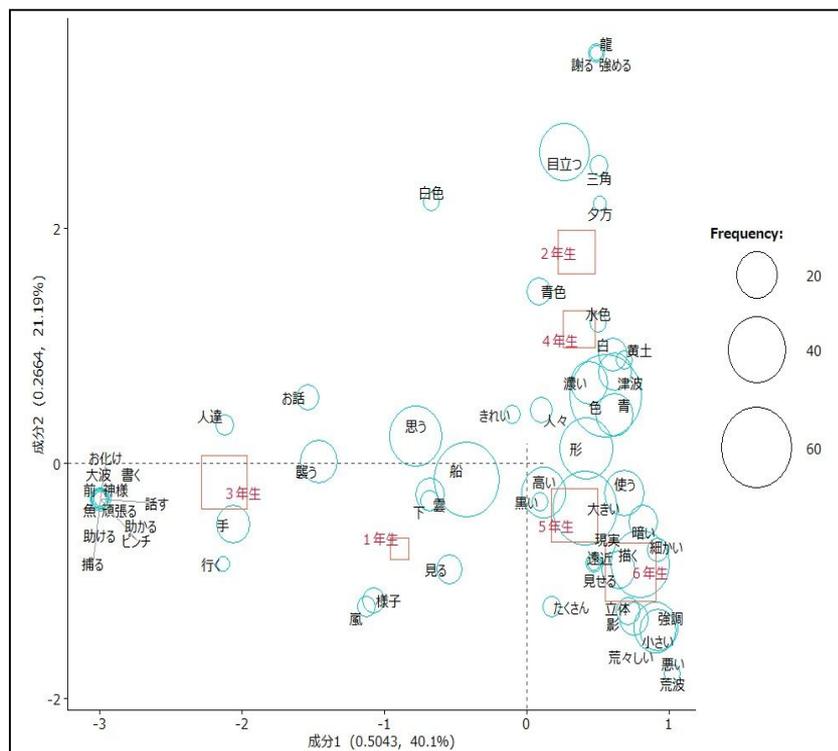


図1. 「作品の主題」の対応分析

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>野網 学   | 4. 巻<br>307         |
| 2. 論文標題<br>図画工作科鑑賞領域における「見ること」「話すこと」「書くこと」についての発達段階の分析 | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>日本美術教育学会学会誌「美術教育」                            | 6. 最初と最後の頁<br>20-28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                          | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                 | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

| 氏名 | ローマ字氏名 |
|----|--------|
|    |        |